

買い物帰りに

松井淑子

うちからスーパーマーケットまでは、徒歩で片道約三十分はかかる。この距離を重い買い物袋を提げて歩くのは、近ごろさすがにしんどくなってきた。だから、以前なら一日ですませていた買い物を、いまでは二、三日に分けて行っている。

買い物方にもくふうが必要だ。軽いけど高張るもの、卵のように毀れやすいもの、ボトル入りの調味料のような重いもの等々……買い物をしてしながらそれらの組み合わせも考える。たとえば大根とサラダ菜と椎茸は一緒に買っても、大根とキャベツとカボチャは一緒には買わないとか。雨の日もむろん買い物には出掛けない。

その日に買うべき品物はお醤油と味噌だった。どちらも一リットル入りの大きなボトルをスーパー備え付けの籠に入れながら、お酢とお砂糖がほとんどなくなりかけているのを思い出し、これを入れる。腕にずしりとくる。これ以上は買えない。

品物を籠から買い物袋に移し替え、通りに入る。いいお天気だ。前夜の強風のせいで歩道一面に散り敷いている落ち葉が、わずかな風でころがったり、小さな渦を巻いて舞い上がったりしている。いつもの通り道の、病院わきのゆるい坂道にさしかかると、私はわざと、「えっちら、おっちら」と小声で掛け声をかけながら登りはじめた。上から下ってきた白髪でくすんだグリーンのコートをきた女の人が、途中で立ち止まって、私のほうを見ている。かなりの高齢者だ、私より年上だろう。そう思いながら近付いていくと、その人は声を掛けてきた。

「風が出てきましたね。どうぞお気をつけて、おだいに」

「ありがとうございます」

と私はにこやかに返事を返したものの、この人はこれを言うためだけにわざわざ私を待っていたのだろうか、声を掛けたくなるほど私は年寄りっぽく歩いていたのだろうか、とがっくりする。

同時に、しばらく前、あとからバスに乗りこんできた高齢らしき女の人に私が座席を譲ろうとしたら、その人から、

「あら、奥様のほうだって……」

と言われたのを思い出した。その人も、いまの私と同じように、内心がっくりした気分を味わったにちがいない。

家に帰って、その日の買い物の重量を測ったら三キロ強であった。これが、私が無理なく持つて歩ける重さの限度だな、と思ったことであった。